恐怖・恐怖対談

吉行淳之介

© *Junnosuke Yoshiyuki,*
Budai Irokawa, Yō Sano, Yasusuke Gomi,
Jirō Ikushima, Akiyuki Nosaka, Shigeta Saitō,
Shōichi Ozawa, Seitarō Kuroda,
Takeshi Kaikō, Hisashi Inoue,
1980, Printed in Japan.

恐怖・恐怖対談

昭和55年5月20日発行
昭和55年6月20日2刷

著　者　吉行淳之介 ほか
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
162 東京都新宿区矢来町71
電話・業務部 (03) 二六六一五一一一
・編集部 (03) 二六六一五四一一
振替・東京四―八〇八
印刷所　株式会社金羊社
製本所　株式会社大進堂
定　価　八三〇円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

色川武大――赤いポチポチ変幻篇　5
佐野洋――靴下のなかの秘密篇　29
五味康祐――教祖ご託宣篇　53
生島治郎――怖いもの探しウロウロ篇　75
野坂昭如――術前術後篇　99
斎藤茂太――「一夜にして白髪」篇　123
小沢昭一――亀は東を向いてナクばかり篇　145
黒田征太郎―リメンバー・ニューヨーク・復讐篇　167
開高健――大声大大震動篇　187
井上ひさし―さあーみんなでいっしょに怯えましょう篇　209
あとがき　229

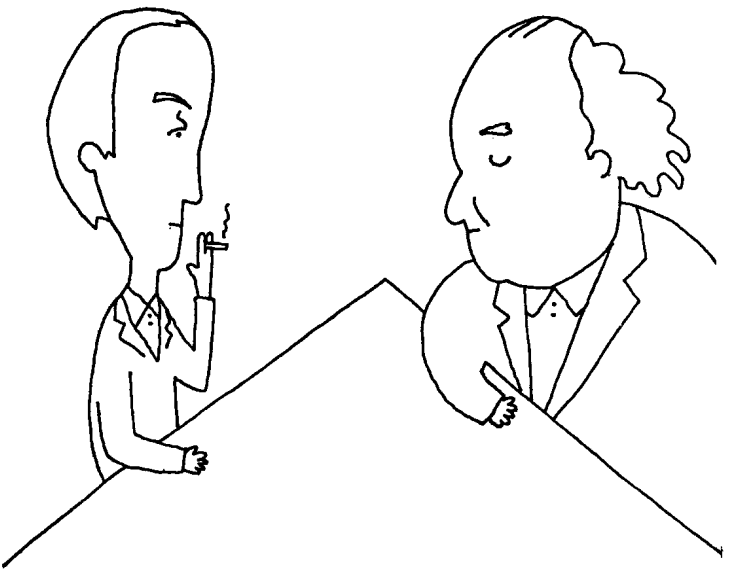
装幀・挿画　和田　誠

恐怖・恐怖対談

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

赤いポチポチ変幻篇

色川武大



色川武大さんとは二十年ほど前からの知り合いだが、こういう話を聞いたのは初めてである。色川さんには二つの顔があり、その一つはモトドリの切れた武芸者のようで、眼光鋭く、またはさらに不気味にどんよりしている。もう一つは、モチ竿を片手に、ムギワラ帽子をかぶってトンボ釣りに出かける半ズボンの小学生のような、無邪気な顔である。ところで、色川武大という名前に馴染みがない人も、本文を読めばそれが誰か、すぐ分かります。

〝ハスラー〟イコール色川武大

吉行　色川武大イコール阿佐田哲也だってことを知らない人は、まだかなりいますね。

色川　ええ。

吉行　そのことでキョウフ的な話がありましてね。「怪しい来客簿」（色川武大著・話の特集刊）の出版記念会の時、あなたもよく知っている男がちょっと遅れて来て、「今日は阿佐田さん来てないですか」って言うんだね（笑）。ギョッとしてみんなで顔を見合わせてしまった。よく考えると、どうやら色川武大と阿佐田哲也が同一人物だと知らなくて、しかし出版記念会の案内状を見ると発起人のところに知った名前が並んでるし、どうも町内の寄合いらしいから行かないと損するみたいな気になって来たらしいんだね（笑）。色川さんも、おおまかな友人を持ったもんです。

色川　色川武大がペンネームで、阿佐田哲也が本名だと思ってる人もわりにいますね。

吉行　阿佐田哲也が「徹夜して朝だ」から来ているのも、すぐにはネタがワレない。うまいネーミングですね。

色川　「ハスラー」って映画がありましたね。〝ハスラー〟の日本語版みたいな言葉がないような気がしたもんですから……〝ハスラー〟を非常に日本的に訳すとアサダテツヤになるんじゃないかなと思ったんです。

吉行　あれはポール・ニューマンともうひとり……あなたはいまの体型からいうと相手のミネソタ・ファッツをやったほう……。

色川　ジャッキー・グリースン。

吉行　うまい役者だ、両方とも。あれはファットが「デブ」でしょう。複数になってファッツになると「偉大なるデブ」という意味になるらしい。敬意が入っている。徹夜になって、朝、負けてるほうのファッツが洗面所に立って、ゆっくり手を洗って、シッカロールみたいな粉を手に振って出てくる。あれでもうポール・ニューマンが負ける、という感じを出していましたね。

色川　ぼくも、昔は細いほうだったんです。

吉行　その頃からの知り合いですよ、ポール・ニューマンの一人二役で(笑)。「ハスラー」が日本で封切られたのは十五年ぐらい前でしたか。あのころはまだ細かったですか。

色川　ええ。昭和四十年前後に急に太り出しました。

吉行　大体映画の筋なんて忘れるんだけど、あれはよくおぼえている。麻雀(マージャン)の時なんかまねをしてね。徹夜までいかなくても、途中で洗面所に立って、手を洗って、シッカロールつけて……。

色川　吉行さんは戦後のころは何キロおありでした。

吉行　いまと同じで、五十八キロです。ただ体型が違ってきてね、手足が痩(や)せて腹が少し出てきたから、なさけない。

色川　じゃあ全然栄養失調的なことはなかったですか。

吉行　ああ、戦争直後のひどい時ね。あのころはそもそも秤(はかり)というものがなかったでしょう。

色川　ぼくは五十二キロでした。

吉行　おそらくぼくもそのくらいでしょう。雑草食ってましたからね。あのころは大変ですよ。それから結核のあと、五十キロをかなり下まわったことがあります。

生き残ったのはクスリを打たなかったから？

吉行　話は「怪しい来客簿」に行くんですけれど……。あれを読んで、学校に行かなくなるタイプっていうのはふたつあると思った。具体的に言いますと、ぼくの親父の弟、つまり叔父が岡山の然るべき中学に入って……。

色川　時々お書きになる……。

吉行　そう、あの黒眼鏡のガラの悪い叔父ね。これは硬派と軟派を兼備しているんだな。で、すぐ中学を退学になるんですよ。岡山で四つ退学になった。そうすると小都市だから、もう中学がない。最後は名古屋の中学に入ったわけです。これは地面の上を活発に暴れまわるタイプ。それともう一つは、あなたのように、地面にどんよりうずくまって、時々もぐったりしてね（笑）。

色川　もう石のようになっちゃう。

吉行　暴れまわるほうのタイプは、或るパターンができてますね。しかし石のタイプはあまり知られていない。とりあえずそのへんを聞いてみたいと思って今日は来たんです。

色川　あの本が出ましてから大勢の人に言われるんですけど、ＬＳＤをやってたでしょう、少なくとも麻薬体験はあるでしょう、クスリのなかでも特にＬＳＤの人が見る幻想と非常に似ている、こう言うんですね。確かに実際にＬＳＤをやってた人たちの幻想の話を聞きますと似たのがあるんです。ところが注射が嫌いだったものですから、クスリの真只中に一時期はいたんですけれど、ぼくはまったく打たなくて……いま生き残っているのは、そのクスリを打たなかったというのがたったひとつの理由じゃないかと思うんです。だけど、打たなくてもＬＳＤと同じようなものが出てくるのは便利のような気もするし（笑）。

吉行　ヒロポン飲むのもやらなかったですか。

色川　錠剤は中学時代に。わりに普通にみんなやってましたね、試験勉強だとか。

吉行　薬屋で売ってましたよね、ゼドリンとか。あれは、戦争中、特攻隊用につくられた、とい

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

う噂でした。

色川　たとえばＬＳＤの場合、最も一般的な感じとして、地球がシワシワになる感覚があるんだそうです。そのシワシワのところに自分がへばりついているような感じが。それから、地球が自転している実感があったり。

吉行　回転しているところに自分が乗っかってる。

色川　舟のように。そういう感じがまず最初に来るんだそうですけどね、ぼくもそれはちょくちょくあるんです。それから山が恐いとか、そういうような感じもＬＳＤ的だというんですね。

吉行　ＬＳＤの反応は個人差が非常に大きいでしょうね。

色川　そうでしょうね。ひとり先達がいないといかんとよく言いますね。ＬＳＤはひとつの心情が非常に拡大されるものだから、死にたくなったり、窓から飛び出したりという、だからコーチ役がいないと。

吉行　それが恐いですね。

特徴のない男？

色川　ぼくは小さい時から時々変なものを見たりする癖があるんですよ。

吉行　それは幻覚として、ですか。

色川　ええ。戦争中に家庭用の風呂が物資欠乏で駄目で、銭湯に行くでしょ。夕方銭湯に行く途中で不意に空に竜が昇って行くんですね。ちょっと豪壮なんですけど。

吉行　いま、ラーメンの丼の模様を連想しちゃ、いけないな（笑）。

色川　凄い太い竜が昇って行くんです。空は青白くて、ゴウゴウと鳴っているようなんですけど音は聞えない。そういう瞬間が二、三度あって、ほかの人に聞いても、そういうものを見たこと

のある人がいないし……。

吉行　ぼくもないですね。

色川　何か、それは自分の特徴かなという感じがしてたんですけれど……後年になって得た知識では、ナルコレプシーというのは十歳前後から発病するのが多いんだそうで、その時期から徐々に幻視、幻覚を見ていくというんですね。

吉行　ナルコレプシーって色川さんの持病ですね。そもそもあれは何なんですか。

色川　まだまったく原因がわからないんですけれど、主症状は諸関節の脱力症状、しびれるわけです。で、まあ幻視幻覚、それから睡眠発作がともなうとか……それだけわかっているだけで。

吉行　薬はないんですか。

色川　発作をとめる薬はあるようです。

吉行　ステロイドですか。

色川　東大の研究室の医者によりますと、睡眠薬と精神安定剤と脱力症状を防ぐやつと三種類入っているという。しかしわたしは使ってないんです。東大に行ってないもんですから。だって治しようがわからないんじゃ、あなたは確かにナルコレプシーですと言われただけじゃ、行ったって行かなくたって……。

吉行　それはモルモットにされるだけだから、行かないほうが利口だ。

色川　それで、自分が特徴だと思ってたものが単なる病状じゃないかという気が、今してるわけです。

吉行　ただ、特徴と病状は非常に密接に絡み合ってるでしょう。

色川　絡み合ってますけれど、単なる病状なんで、この病気が治ったらまったく特徴のない男になっちゃうんじゃないかと思って（笑）。

吉行　すると、突如眠ってパッと目がさめるというのはその症状のひとつなんですか。

色川　そうなんです。睡眠のリズムが壊れちゃう。重くなれば二十四時間に平均して散っちゃうわけです。それが度合いによりまして、たとえば二時間持続して眠れる。もう少し重くなれば一時間しか眠れない、こういう状態になるわけです。そして、あとの時間の間に、二時間に一ぺんとか、一時間に一ぺんとか、数分間ぐらいの睡眠発作が起きてくるわけです。

吉行　あるいは数秒か。

色川　ええ。数秒か、数分間か。

吉行　あなたは、麻雀やってててですね、眠ってるのに当り牌握ってるとか、眠ってたくせに役満でアガッちゃうという伝説が沢山あるけれど、あれはどういうことです。

色川　そういうこともあるんですけれど、その逆のほうが多いです。発作は、つまりだんだん緩がたまっていくように度合いが高まってきて、ほとんど癲癇の症状に似た感じになるんですけれどね。麻雀やってても、ほんとうにコトンといくのは数秒ないし数分なんです。ですから、その前に押えてる牌があったりする。そのあと何秒間か、わからない時間があって、自分が捨てた牌すらわからないという状態はあるんだけれど、それはすぐ回復しちゃうんです。一旦ピークに達すれば。

　ですけれど、非常な苦痛もあるんですよ、実は。

吉行　どういう感じですか。

色川　単に眠るというんじゃなくて、夢にうなされている状態ですね、金縛りにあって体が動かなくなるとか。はなはだしい時は、座ってて体が横倒しになって、肩が畳に着く時があるんです。一瞬ですけどね、どうしてあんな形ができるのかと思うような、骨がなくなるような感じでもってバッタリ倒れる。バネみたいにもとに戻りますけれど(笑)。

吉行　麻雀をやってる時にバネ仕掛けで戻られたら、かなり驚くね。

色川　喜怒哀楽と同時に神経が揺れるわけですね。これが一番いけない。ですから、麻雀の時に一番発作の頻度が高いんです。一局ごとに小さな波がありますからね。

吉行　やっぱり阿佐田さん――この際は阿佐田さんになっちゃうわけだけれど（笑）、阿佐田さんぐらいでも喜怒哀楽で揺れ動くわけですか。

色川　あります、あります。ですから、昔はポーカーフェイスでもってツモリアガッてたのが、いまでもポーカーフェイスのつもりなんですけれど、体がガクッと来たりする。体のほうに正直にあらわれる。だから畑（正憲）さんがよく言うんです。ぼくが眠りそうになったら大きい手が来てるぞって。つまり心が揺れ動くから、発作を早めちゃう。よく、眠りながら大きい手をアガッたと言われたりするのは、それは大きい手とか、パンチのある手が来てる時にそうなることが多いんです。

吉行　結城昌治とか園山俊二なんてのはずっと単純で、われわれ、無駄話しながらやってるでしょう。返事しなくなると大きな手が来てるんだ。洒落（しゃれ）の応酬に敏感でなくなってくる。そこですぐわかっちゃう。スケールが違うね（笑）。

赤いポチポチ……

色川　目をつむってますと、いろいろな幻影が出てくる時があるでしょ。目をあいている場合に、それが赤いポチポチになって出て来るんですよ。仮に人物が出て来るとしますね、それが小さな赤いポチポチになる。麻雀をやってる時なんかですと、実像は見えないんですけれど、その人物が何をやって、どこに来てるかっていうのがわかるんです。だからそっちのほうに気をとられちゃうというか、体が動かなくなる、というのもあります。

吉行　赤いポチポチというのは単なる点ですか。

色川　点の少し大き目の……。典型的なのは、最初非常な美女が出て来るんです。出て来るたんびにぼくはどうしてこんな想像力があるのかと思えるようなタイプの美女が、いろんな状況で出て来るのです。

吉行　それは起きている時ですか。

色川　起きてる時も、眠ってる時も。起きてる時は、目をつむればそれがはっきり見えるわけです。そして、非常に魅力的でコケティッシュな女なんですけど、数秒間のうちに希代の悪相に変っていくというパターンがあるわけです。その変りかたが凄まじい。最初、魅力的な目でぼくの目を見つめるようにする。この視線がもの凄く痛いのではねのけようとするんですけど、体が金縛りに近い状態で、まあ関節の問題もあるんでしょうけど、なかなか手が自由にならない。動かそうとすると体に一種の痛みがある。しかしほっとけばその目がだんだん鼻の先に近寄って来るわけです。だからなんとかしなくちゃいかん、腕でよけても駄目なものだから、殴るということに……そうすると、悪相に変りかけているあたりでは顔がひん曲ったり、いろんなことをするわけです。

吉行　パンチは当るわけね。

色川　当って、よけいに悪相というか凶相になって来るわけです。それが毎日、毎日出て来まして、次第にこちらも慣れてきますから、パンチもよく当るようになるでしょう(笑)。向うも殴られる頻度が増して来るわけですから、なんだか暴力を振るっているのがこっちのような気がして、向うの世界との関係ではぼくのほうが悪いことをしていて、向うが次第に凶相を深めて来るのはやっぱりオレが悪いのかなあという気もするわけですよ。

吉行　正当防衛ということもある(笑)。

色川　目の痛さにしても、向うに一体悪意があるのかないのか、ただ偶然こっちを見ているのを、こっちだけで痛さを感じてるのかもしれんというふうにも思えて来るわけです。

吉行　それは勿論、大人になってからの幻覚ですね。子供の時からじゃないでしょう。

色川　そうです。痛覚をともなわないのでは、視野全体に、特に自分の生れた家とか部屋が出て来ちゃうってことがあるんです。ぼくはいろんなところを転々としてたんですけれど、ほかの家はまったく出てこないで、生家しか出て来ない。

吉行　生家にはいくつぐらいまでいましたか。

色川　ついこの間まであったんです。いま、壊しましたけど。

吉行　いや、色川さんがそこに住んでいたのは。ここが自分の家だという意識を持てる年齢ぐらいまではいたわけですね。

色川　ずっといました。ただ、ぼくは出奔してることが多いもので……。親は住んでましたから、建てかえたり直したりしていますね。だけど、イメージに出て来るのは、同じ部屋でも、少年時代のたたずまいなんです。自分が死んで、白い布みたいなもので巻かれてそこへ帰って来る。ちょっと動きがともなう場合はそういうパターンになってくるわけです。窓のあたりから家族の様子を見ているとか、あるいは庭のあたりにたたずんでいるとか、部屋のなかに入っていって天井などにひっついているとか、そういうのも頻度が高いですね。

吉行　それはかなり気味の悪い幻覚ですね。

色川　四十年代に頻々（ひんぴん）とあったのは、枕から手が出て来るんですよ。ぼくは慣れてるもんであまりびっくりもしないけれど、その話を聞いた人が、これは本当に気違いかなという目をした（笑）。手だけなんですけれど、枕の両側から出て来て、首をこう締める。実際には強く締めないんですけれど、こう締めて来るという感じの昼夜があったですね。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo